

パリ高等社会科学研究院教員のマリエル・マセ氏を、2018年10月21日から30日まで本学に招聘し、その滞在中、10月25日に日仏会館にて、「今日文学に何ができるのか？」という鼎談（他の参加者：ブランディヌ・リンケル〔作家〕、小野正嗣。司会：根本美作子）に参加してもらったほか、10月26日に『人類学をひらく——詩がおしえてくれること』という講演と、翌日27日に国際シンポジウム（筆者主催）『ピエール・パシェまたは自伝的エッセー——今日一人称で書くことの意味』にて「死者に語りかけること、聞こえない死者に語りかけること」という発表を行ってもらった。各回ともに大変盛況な催し物となり、現在、フランスで注目の研究者マセ氏の考察に、さまざまな人が刺激を受けた模様である。

日仏会館の鼎談では、移民問題を中心に、ふだん声の聞こえてこない者の声に耳を傾けるという行為の必要性を、文学を通して語りかけることができるのではないかという共生の思想がマセ氏によって提示された。その際、そうした人々の声を代弁するのではなく、そうした人々に寄り添い、そうした人々を「彼ら」と一括りにして「わたしたち」の対岸に据えて考えないこと、想像力を発揮して、ともにあるということを文学は語りはじめていることを指摘した点に、マセ氏におけるピエール・パシェの仕事の影響が見られた。

今回マセ氏を招聘した理由の一つは、去年から続けているわたしの個人研究、「ピエール・パシェの作品における個人と文学の問題」の一環で、パシェの仕事の特徴づける上で、フランス文学の地平におけるエッセーというジャンルについて考えたく、エッセーについて本を執筆し、エッセーに特別な関心を寄せているだけではなく、実際に生前のパシェと関係の深かったマセ氏をお呼びして、エッセーという観点を出発点に、現在における文学についての意見を聞きたいというものであった。マセ氏は必ずしも明言しないが、声のない者の代弁をするのではなく、寄り添い、ともにあろうとするという彼女の姿勢には、明らかにパシェ的な思想の形跡が見受けられる。

また、翌日の講演で彼女の論じた人類学的な「開け」は、この共生の思想を世界を構成するものすべてに敷衍しようとする非常に画期的、且つ刺激的な試みで、多くの聴講者の関心を集めた。石となること、あるいは難民の生命を飲み込んでしまう海に耳を傾ける文学・芸術における最近の試みを紹介しながら、マセ氏は主に詩を中心に、文学が声のないものに声を与える様を伝え、そうした新しい共生の理念を説いた。

最後のシンポジウムでは、声のない者を死者に特化し、パシェの論文「死者に語りかけるエレクトラ」を丁寧に読みこみながら、エッセーという形が、パシェに「ものごとを精確に言う努力」を意味したことを論じた。死者に語りかけるということは、彼らの非存在に耳を傾けることを意味する。死後に何らかの生の続きがあることを否定し、あくまでも死者の非存在を見据えることの狂気を、パシェの論文はその不撓不屈の注意力（attention）で支えようとする。死者の現実、それは死者の非存在である。マセ氏はこの注意力の活動を可能にするものこそエッセーの力学であるとし、パシェが死者の無に注意を払うことができるのも、エッセーの「ものごとを精確に言おうとする姿勢」に多くを負っていることを指摘した。最後にパシェの、「死者の現実に耳を傾けさせるこの動きなしには、わたしたちは一つの部屋から別の部屋にいる者に語りかけることもできないだろう、生きている者同士で」という言葉を取り上げ、死者の現実が、この世を成立させているさまを明らかにして、マセ氏は声をもたない者たちに耳を傾けることの意味を改めて強調した。